

「主イエスとともに」(要旨)

聖書箇所：マタイ 8:18~27

【1】向こう岸へ

山上の説教に続く奇跡の数々。大勢の群衆がイエスのみもとに集まりました。イエスが「あらゆる病、あらゆるわずらいを癒された」(4:23)お方であり、「律法学者たちのようにではなく、権威あるものとして教えられたから」(7:29)でした。今日の聖書箇所で、イエスはユダヤ人の居住地域から異邦人が住む「向こう岸」(8:18)に移ります。

【2】主イエスとともに

イエスが「向こう岸に渡るように命じられた」(18)目的として次のことが考えられます。まず、休むためです。イエスは、みもとにやってきた群衆のため、山上で説教しました。山から下りて来られると、大勢の群衆を癒されました。その列は夕方になっても途切れることがありませんでした。イエスは、疲れ切った弟子たちが休息できるよう、寂しいところへ舟で行くよう促すことができました(マル6:31)。イエスは舟をご自分の休み場とされました。イエスはご自分にも弟子たちにも休みが必要であることをご存知でした。

次に、ご自分に従う者に決断を促すためです。イエスが向こう岸に行くとは表明したため、みもとに集まった人々は決断せざるを得ませんでした。イエスと共に向こう岸に向かうためには、同じ舟に乗らなくてはならないからです。イエスの教えに共鳴し癒しに期待する人々は、大勢おり、その中に「一人の律法学者」(18:19)も含まれました。イエスは、ご自分に従うことが律法学者の思い描く生活とは異なることを「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが…」(20)という返答によって明らかにしました。別の一人

の弟子は「まず行って父を葬ることをお許しください」(21)と願いました。W.バークレーはその意味することを、旅行に行く前に、両親と親戚に対する義務を果たさなければならぬこと…(つまり)父親が死ななければ家を留守にできない…(言い換えると)「私は、父親が死んで自由になったら、あなたに従います」と…イエスに従うことを無期限にのぼした、と解説します。イエスの弟子となることは両親を敬うことを軽視することではありません。イエスは、ご自分に従う者に、この地上において「旅人であり、寄留者である」ことを自覚し、「国籍は天にある」者として生きると説かれたのです(ヘブル11:13,ピロ3:20)。

【3】「人の子」であるイエス

マタイの福音書で初めて「人の子」(20)という表現が登場します。イエスは、ご自分の人間性と神性を表すために「人の子」ということばを用いました(ダニエル7:13)。イエスは人として疲れを経験しました。大波もイエスの眠りを覚ますことができませんでした。同時にイエスは「風と湖を叱りつけられた」(26)のでした。海のとどろきを鎮められるのは神のなさることです(詩篇65:7)。それをイエスはなさったのです。

▷イエスは、ご自分について行きたいと願う者に、「向こう岸」に渡るように命じました。平穏無事な生活から予測不能な舟上へ。主イエスと共に舟に乗った弟子たちは、激しい嵐の中でイエスの平安と救いを経験したのです！

